

2013 年度 卒業式 式辞

中京大学学長 北川 薫

中京大学で学び、本日ここに、めでたく卒業式を迎えられた学部卒業生の皆さん、ならびに大学院で修士あるいは博士の学位を取得された皆さんに対し、教職員を代表して心からお祝い申し上げます。

また、ご子弟の卒業を待ち望んでこられたご父母や保護者の皆様の喜びもいかにばかりかと拝察いたします。今日までの慈しみに対して心からの敬意とともに、大学へ賜りましたご支援に感謝を申し上げます。そして、本日ここにご列席の方々と一緒に、卒業生諸君の希望に満ちたこの日を、晴れやかな気持ちでお祝いしたいと存じます。

さて、私は常々「中京大学の歴史は、留まることのない挑戦と改革の歴史だ」と申し上げております。1954年に商学1学科の短期大学として開学し、今や11学部と11の大学院を擁し、学生数1万3千余人という日本有数の総合大学に発展しました。そして、皆さんが実社会に踏み出す2014年度は、開学60周年です。大学は、初心にかえって新たな発展の歴史を刻むこととなります。

卒業式はまた、新たな一步の始まりでもあります。門出にあたり、学長として、中京大学60年の歴史を、まさに体現して巣立つ皆さんが、母校に脈々と流れる「挑戦と改革」の精神を堅持し、閉塞感すら漂う現代を革新していくことを希望します。

先月開催されたソチオリンピックに、本学からはOB・OGを含めると7人の選手が出場しました。その中でも、浅田真央さんは、フィギュアスケートのショートプログラムで思わぬ結果になりました。

しかし、一夜明けた翌日のフリープログラムでは、自己最高を更新する素晴らしい演技を見せ、日本ばかりでなく世界の人々を魅了しました。浅田真央さんはメダルより重く、価値ある輝きを見せたのです。

彼女はトリプルアクセルという大技に挑戦し、前回のバンクーバーオリンピックで銀メダルに輝きました。バンクーバー以降は、この大技を封印して、自らのスケートを、基礎から再構成を図りました。そして、今回、ようやくトリプルアクセルの封印を解き、さらに新しい挑戦である3回転—3回転の連続ジャンプを取り入れたのです。ショートプログラムで一度失敗しましたが、フリーでは恐れることなく、己が信じる演技を披露したのです。

これこそ「挑戦と改革」の精神です。挑戦に失敗はつきものです。失敗を恐れては、改革は成らず、また発展もないのです。

ショートプログラムの思わぬ結果に、「この子は大事な時に必ず転ぶ」とまで言われました。しかし、帰国後の外国特派員協会の会見では、質問に対して「人間なので失敗することもありますし、自分も失敗したくて失敗したわけじゃないので、それはちょっと違うかなと思った」と堂々と受け応えていました。そして、その発言者に対しては「発言したこ

とを少し後悔しているかなと思います」と、逆に気遣う余裕すらみせたのです。

人間の歴史もまた、挑戦と改革の歴史です。19世紀中葉に哲学者・経済学者として活躍し、セント・アンドリュース大学名誉学長も務めたジョン・スチュアート・ミルは、自由論の中で「慣習による専制がどの国でも常に人間の発展を抑える障害となっている」と指摘し、『唯一の確実な永続的な改革の源泉は自由である。なぜならば自由によってこそ、およそ存在している限りの個人と同じ数の独立した改革の中心がありうるからである。異端の中から進歩に向かう新しい芽を育てられるかどうかは文明の創造力を左右する決定的な要因であることは明らかだ』、と述べています。

古いしきたりにとらわれない個人の自由な発想、精神と、それに基づく挑戦と改革とが、いかに社会の発展に大きく寄与するかをミルの言葉は示唆しています。

高名な経済学者のケインズも、同じようなこと、すなわち、多様な個人の挑戦に寛容であることが、社会の改革と発展につながる、と述べています。

今、世界を見渡すと人類が挑戦し、改革しなければならない課題は山積しています。平和の祭典ソチオリンピック・パラリンピックは成功裡に終わりましたが、ウクライナでは、クリミアを巡って、ロシアとアメリカや、EU などとの対立が表面化しています。尖閣、竹島を巡っては、日本と中国、韓国もまた緊張関係にあります。世界はひとつ、を標榜するグローバルな時代に、なお残るナショナリズムの対立です。

ヒト・カネ・モノは国境を越えて、自由に行き交いますが、人類はまだ国や民族というナショナルの考えを乗り越えてはいません。自らのアイデンティティーを国や民族に置く限り、なかなか乗り越えられないのかもしれないかもしれません。

先に引用したミルやケインズの言葉から推察できるように、世界の多様性や自由を尊重しながら、どこまでも自分は自分であり、個人として独立し、それぞれの個が国や民族を超えて、一つの地球につながることを、これができるならば、国や民族を媒介とした争いはなくなるかもしれません。しかし、現実にはネットの世界でみられるように意見の違うものを排除し、徹底的に攻撃する“炎上”も起こっています。

本学が掲げる建学の精神、その実践としての四大綱は①「ルールを守る」②「ベストを尽くす」③「チームワークをつくる」④「相手に敬意をはらう」と教えています。意見は違っても相手を認め、敬意をはらい、人間としてのルールは守る。その上で意見の違う相手ともチームを組むべく努力をし、ベストを尽くして挑戦する。これこそ、まさにグローバル化が目指すべき方向ではないでしょうか。

どうか、皆さんには四大綱を基礎として、挑戦と改革の精神で、このグローバルな時代を切り開いてほしいと願い、皆さんの前途に幸い多き道が開けていることを信じ、それぞれのこれからの健闘を祈って、私の贈る言葉といたします。

本日は、ご卒業、誠のおめでとうございます。